

「東京女子大学 日本文学」第112号

小宮くんの追悼号です。

該当部分を抜粋して紹介いたします。

# 東京女子大學 日本文學

## 第百十二號

### 小宮彰 教授追悼号

#### 目次

- |                                     |               |
|-------------------------------------|---------------|
| 小宮彰先生をしのぶ                           | 今井 久代 (一)     |
| 小宮彰先生 主要業績目録                        | (五)           |
| 海上の道 — バリから西表へ —                    | 大久保喬樹 (一一)    |
| つぶやく兼好 — 第四一段小考 —                   | 中野 貴文 (一九)    |
| 『源氏物語』研究                            | 岩村 良子 (二九)    |
| — 紫の上の幼少期に込められた意味 —                 | 佐野佳矢乃 (五一)    |
| 『とりかへばや物語』宰相中将論                     | 堀井 彩香 (六九)    |
| — 『有明の別れ』との比較を通して —                 | 小宮 千穂 (九一)    |
| 近世の服飾語彙                             | 金子 彰 (一〇五)    |
| — 浮世草子・洒落本を中心として —                  | 山本 康世         |
| 松浦理英子『親指Pの修業時代』論                    |               |
| — その多様なセクシュアリティを読み解く —              |               |
| 世阿弥能本『知章』語彙総索引稿                     |               |
| 東京女子大学図書館所蔵 伝正徹筆『古今和歌集』翻刻稿(二) (二三九) | 東京女子大学古典文学研究会 |
| 格助詞「に」と「で」の深層格                      | 丸山 直子 (二七五)   |
| — 出現状況把握に向けての問題点の整理 —               |               |
| 第三十五回 松村緑賞                          | (二六五)         |
| 二〇一五年三月卒業論文題目                       | (二六五)         |
| 二〇一五年三月修士論文題目                       | (二七一)         |
| 東京女子大学日本文学研究会規約                     | (二七三)         |



小宮 彰 教授

## 小宮彰先生をしのぶ

小宮彰先生の訃報が突然飛び込んできたのは二〇一五年の一月二十二日のことだったか。ちょうど会議室に数人が集まっていたときだったように記憶している。

このところ、お具合が悪いようなご様子だったので、三月のオープンキャンパスを近藤先生が交替されると決まった矢先だった。丸山先生が十八日にメールを送ってもお返事がなかったのだが、あとでわかったことだが、そのころ既に先生はあちらの世界へと旅立たれたあとだったのだ。

小宮先生は、二〇〇九年度の現代教養学部への改組にあたって、人文学科日本文学専攻に移っていらっしやうた。ご専門は比較文学・文化である。先生は哲学科に着任されたあと、共通教育（副専攻）に移られて、全学に向けて東京女子大学の特徴である比較文学・文化の教育を担うほか、コンピュータと人間を考える授業を担当されていた。先生の世代（それも文系）にしては珍しいことだが、大変コンピュータにお詳しくだったのである。そして、比較文学・文化において日本近現代文学（というより寺田寅彦を扱われるなど、文学だけでなく評論や思想に重きを置かれていたようだ）も取り上げるからということ、日本文学専攻に移ってきて下さった。

日本文学専攻は伝統的に行事や学内業務もいろいろあって、なかなか忙しい。だが小宮先生は、少しも嫌な顔をなさらずに、移ってきた当初からいろいろと積極的に担って下さった。新入生カンファレンスにも参加され、学生にまじって飄逸な句をつけていらっしやうた。私などは偉そうに講義では和歌の話などするのに、実作はぜんぜん自信がなくて、学生にまじってなどできずにいたのだけれども。講師招待会にも謝恩会にもいらっしやう



て、そこでの歓談や全体に向けてのお話しなどのなかで、思いもかけず先生の素顔に触れることも多かった。先生は長く本学にいらっしゃったので、ことばの端々から昔ののんびりとした東女の雰囲気伝わってくるようで、二十一世紀になってから東女にやってきた私には、いろいろと興味深かった。ここ十年ほど、東京女子大はいろいろと改革を重ねており、学部が続いて大学院の改組もあったのだが、ここというところで含蓄あるご意見をお寄せ下さったし、だんだんに卒論や修論の副査も担って頂くようになった。最初はこちらも遠慮する気持ちもあり、多少は節度もあったのだけれど、安藤先生が学部長になられ、鉄野先生が異動されたのにつれて、どんどん専攻内が忙しくなり、小宮先生にお願いすることが増えていった。それらを小宮先生は快く引き受けて下さった。今振り返ってみると、日本文学専攻の新たなメンバーとして先生とゆっくりいっしょできたのは最初の二、三年だけだったのではないかと思う。気がつくとも誰かが忙しくなっていて、先生にはいろいろとお願いしてしまっていた。本当はここ数年、先生は病を得られ、サバチカルの最中には入院もされていたとあとで伺った。確かに二〇一四年度は傍から見ても随分とお具合が悪いのではないかと思われた。それでも先生は一時的なものだからとおっしゃって、できる限り協力して下さったし、前号の大久保喬樹先生の退官記念号には玉稿をお寄せ下さった。結局このご論文が絶筆のような形になってしまった。

本来はこの号は「小宮彰先生を送る」と小宮先生の退官記念号で、小宮先生ご自身がまた健筆を振るって下さるはずだったのである。退官まであと一年を残すところで、突然に旅立たれてしまわれたこと、お具合がとわかっていながら、ついいろいろとお願いしてしまったこと、悔やんでも悔やみきれない。それでも生前、日本文学専攻の専門科目（ゼミ）を担当されて、講師招待会で「日文学の学生気風の良さを、演習を担当して私も実感しました」とおっしゃってくださいました。縁あって日本文学専攻で共に過ごさせていただいたことが、先生のお心にも良いものであったのならと切に思う。

小宮先生が亡くなってから、学内外の多くの方が先生を慕っていらしたことを知った。博学で話が面白かった、

と皆さんおっしゃっていた。先生の研究室は、学外の方たちのご協力であつという間にきれいになった。先生のご蔵書と思い出は、それぞれの場で生き続けているはずである。

生前の先生のさまざまなお尽力に心より感謝し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

二〇一六年三月

日本文学専攻主任 今井久代

# 小宮彰先生 主要業績目録

## 著書

二〇〇九年 一月

『ディドロとルソー 言語と《時》——十八世紀思想の可能性』（思文閣出版）

一九八二年 一月

三十二卷第一号  
「シユピッツァーとディドロ——文体分析と時間性」（『東京女子大学附属 比較文化研究所紀要』第四十三卷）

## 学術論文

一九七四年十一月

「安藤昌益とジャン・ジャック・ルソー——文明論としての比較研究」（『比較文学研究』第二十六号、東大比較文学會）

十一月

「ディドロとルソー 内在と外在——言語コミュニケーションをめぐる」（『思想』No. 708、岩波書店）

一九七八年 六月

「ルソーと不可逆の《時》」（『思想』No. 467、岩波書店）

十月

「起源と剰余——六十年代以降のルソー研究の動向から」（『社会思想史研究 社会思想史学会年報』第二号、社会思想史学会）

一九八四年 十月

「自伝の《時》——新井白石『折たく柴の記』における《時》の表現をめぐる」（佐伯彰一編『自伝文学の世界』、朝日出版社）

「クロード・アドリアン・エルヴェシウスの

一九八五年十二月

「《啓蒙》の知と主体の問題——ディドロ・ルソー・エルヴェシウスの視界」（大森莊蔵ほか編『新・岩波講座〈哲学〉第十五卷 哲学の展開 哲学の歴史2』、岩波書店）

知の地平——『Juger, c'est sentir』をめぐる」（『フランス語フランス文学研究』Vol. 33、

日本フランス語フランス文学会）

一九八一年 九月

「ディドロの比喩——『ダランベールの夢』読解の試み」（『東京女子大学紀要論集』第

一九八七年 一月

「明治期文明論の時間意識——徳富蘇峰『将来之日本』における明治日本の現在」



〔東京女子大学附属 比較文化研究所紀要〕第四十八巻)

二〇一五年 三月

告〕第十一号)

一九八九年 五月  
『紅樓夢』における文明論的切断と近代日本  
〔江戸の思想 論集〕、高崎哲学堂設立の会)

## 書 評

〔大正九年における寺田寅彦の随筆の始まり〕(『東京女子大学 日本文学』第百十一号、東京女子大学学会日本文学部会)

一九九二年 一月

『十九世紀人類学と近代日本——足立文太郎を中心として』(『東京女子大学比較文化研究所紀要』第五十三巻)

一九七七年十一月

〔日野竜夫著「江戸人とユートピア」〕(『比較文学研究』第三十二号、東大比較文学會)

一九九四年 十月

『科学テクストの文体——大橋力『情報環境学』(大沢吉博編『叢書比較文学比較文化6 テクストの発見』、中央公論社)

一九八一年 七月

〔作田啓一著「ジャン・ジャック・ルソー——市民と個人」——ルソーと〈近代〉の閉域〕(『思想』No.685、岩波書店)

一九九七年 一月

『寒月君』と寺田寅彦——西洋文明としての近代科学』(『東京女子大学比較文化研究所紀要』第五十八巻)

一九八二年 四月

〔竹田晃著「中国の幽霊——怪異を語る伝統」〕(『比較文学研究』第四十一号、東大比較文学會)

二〇〇二年 九月

『寺田寅彦の文体——生命の物理学』(『比較文学研究』第八十号、東大比較文学會)

一九九〇年 三月

〔中江兆民のフランス〕井田進也』(『比較文学』第三十二巻、日本比較文学会)

二〇〇五年 九月

『寺田寅彦の物理学と〈二つの文化〉』(『東京女子大学紀要 論集』第五十六巻一号)

一九九三年 六月

〔牧野陽子著「ラファディオ・ハーン」出版記念会〕(『比較文学研究』第六十三号、東大比較文学會)

二〇一四年 九月

『寺田寅彦の文学表現としての「随筆」について』(『日本比較文学会東京支部研究報

一九九五年 三月

〔B・M・ボダルト・ベイリー著(中直一

訳)『ケンベルと徳川綱吉』(『比較文学』

第三十七巻、日本比較文学会)

一九九九年 八月

「『福沢諭吉のすゝめ』(大嶋仁)」(『比較文学研究』第七十四号、東大比較文学會)

二〇〇二年 三月

「稲賀繁美編著『異文化理解の倫理にむけて』(『比較文学』第四十四巻、日本比較文学会)

二〇〇四年 三月

「千葉一幹著『賢治を探せ』(『比較文学』第四十六巻、日本比較文学会)

二〇〇五年 三月

「西原大輔著『谷崎潤一郎とオリエンタリズム——大正日本の中国幻想』(『比較文学』第四十七巻、日本比較文学会)

二〇〇七年 三月

「野田康文著『大岡昇平の創作方法——『俘虜記』『野火』『武蔵野夫人』(『比較文学』第四十九巻、日本比較文学会)

二〇一二年 三月

「二〇一一年度日本比較文学会賞受賞  
加瀬佳代子著『M・K・ガンディーの真理と悲暴力をめぐる言説史——ヘンリー・ソロー、R・K・ナラヤン、V・S・ナイポール、映画『ガンジー』を通して』

## その他

(『比較文学』第五十四巻、日本比較学会)

一九七七年 六月

「パリ・日本・テキスト」(『比較文学研究』第三十一号、東大比較文学會)

一九八〇年 十月

「比較文化研究、三つの可能性」(『比較文化』二七一、東京女子大学附属比較文化研究所)

一九八一年 三月

「『若手研究者懇談会』のこと」(『比較文化』二七二、東京女子大学附属比較文化研究所)

一九九三年 三月

「日本比較文学会会員研究分野ディレクトリ補遺」(『比較文学』第三十五巻、日本比較文学会)

一九九五年十二月

「比較文学を学ぶための文献案内」(松村昌家編『比較文学を学ぶ人のために』、世界思想社)

一九九七年 八月

「追悼・神田孝夫教授 神田先生に教えられたこと」(『比較文学研究』第七十号、東大比較文学會)

一九九八年 十月

「第十五回公開シンポジウム 生命倫理の比較文化（司会）」（『比較文化』四五―一、東京女子大学比較文化研究所）

二〇〇四年 三月

「俳諧と物理学―寺田寅彦の2つの世界―」（『比較文化』五〇、東京女子大学比較文化研究所）

二〇〇五年十一月

「追悼・大澤吉博教授 大澤吉博さんとともに歩む」（『比較文學研究』第八十六号、東大比較文學會）

二〇〇九年 六月

「追悼・内藤高教授 内藤高さんのこと」（『比較文學研究』第九十三号、東大比較文學會）

二〇一一年 九月

「シンポジウム 映画の表現、文學の表現―比較文學からの視野」（『日本比較文学会東京支部研究報告』第八号）

二〇一三年十二月

「比較文学比較文化で読み直す寺田寅彦の文学と科学」（『東京女子大学 学報』二〇一三年度第三号）



## 編集後記

『日本文学』第百十二号は、いつも通り力のこもった学術論文数編に加えて、昨年一月十七日に急逝された小宮彰先生の追悼号として、今井久代先生による追悼文と主要業績目録を掲載した。本編集後記でも改めて先生の追懷を記したい。

そもそもこの号を担当した中野は、本学に着任したのが二年前であり、小宮先生と長くお付き合いさせて頂いたわけでは決してない。したがって、改組により先生が日本文学専攻の所属になった経緯や、輝かしい先生のご業績などを語ることもできない。この辺りは前述の追悼文等を、是非ともお読み頂きたい。

しかし僅か二年ではあっても、その中で感じられた先生の温かいお人柄は、大変印象に残っている。着任当初、まだ自分が本学に慣れていなかった四月の頃、「あなたは兼好がご専門でしたか。自分も寺田寅彦という随筆家を読んでいるから、似ていますね」と、優しくお声かけ下さったことは、今も忘れられない。もっと多くの言葉を交わし、先生からご教示を頂きたかったと思うばかりである。

小宮先生の追悼号の編集を担当したが、少しでもあの時の励ましへの応えになったことを願いつつ、筆を擱きたい。

〈中野貴文〉

東京女子大学日本文学 第百十二号

二〇一六年三月十五日 発行

東京女子大学学会

編集兼発行人 日本文学部会

東京都三鷹市上連雀一―二二―一七

印刷所 株式会社 文伸

〒167-8585 東京都杉並区善福寺二丁目六―一

発売元 東京女子大学日本文学研究会

振替口座

〇〇―一―一〇―四―一六八五―一八番

電話 (五三八二) 六三〇―一



